



## 平成の百人一首（ヒライ流）その②

前号に続き、百人一首をヒライ流に現代版に替え歌（パロディー・もじり・語呂合わせ）です。百人一首ですから100首あるわけで、前号で1～20首、今回21～40首です。以降20首ずつ、あと3回に分けてお届けします。飽きずにご笑覧下さい。

百人一首にはいくつかの謎や暗号があるといわれています。100首の歌と歌をつなぐ合せ言葉を絵におきかえると、美しい景色が浮きあがり「歌織物」となるとか、歌に使われる言い回しに注目し、関係のある歌をつなげて「クロスワードパズル」「魔法陣」が作られるとか・・・？

### 元歌

021 素性法師 今こむと  
言ひしばかりに 長月の 有  
明の月を 待ちいでつるかな

022 文屋康秀 吹くからに  
秋の草木の しをるれば む  
べ山風を 嵐といふらむ

023 大江千里 月みれば 千々  
に物こそ 悲しけれ 我が身  
ひとつの 秋にはあらねど

024 菅家 このたびは ぬさ  
もとりあへず 手向山 紅葉の  
にしき 神のまにまに

いま来ると  
言いしばかり  
期待して  
ありがたき君を  
待ちわびるなり

素人奉仕

最近スマホ・携帯のおかげで、待合せ時刻や場所の確認ができるので便利になったが・・・来るかな？

見るからに  
男はみんな  
女好き  
むべ女の子を  
好きと書くらん

文屋康秀

女子 兼

田力

山と風で「嵐」という字になる。「好き」と言う字は、女の子と書く。「男」は田に力だ・・・

ツキがなく  
ちっとも勝てず  
悲しけれ  
わが身ひとつの  
あきらめました

大江万里

勝負事やギャンブルは、ツキがないと勝てない。私は何事もツキがない・・・実力もないうせに、言い訳がましい。

このたびは  
まずとりあえず  
手紙出す  
文字のまずさ  
紙のまにまに

菅直人

最近メールや電話で連絡を取り合うので、文字を書くことが少なく、漢字を忘れたり、書くのが下手になった・・・

025 三条右大臣 名にしおは  
逢坂山の さねかつら 人  
に知られて くるよしもがな

026 貞信公 小倉山 峰のもみ  
ち葉 心あらば 今ひとたびの  
みゆき待たなむ

027 中納言兼輔 みかの原  
わきて流るる いづみ川 い  
つみきとてか 恋しがるらむ

028 源宗于朝臣 山里は 冬  
ぞさびしさ まさりける 人め  
も草も かれぬと思へば

何はともあれ  
大酒のみの  
酒好きは  
人に打たれて  
来るよしもがな

四畳半大臣

酒飲みは酒がなかなかやめられない。少し懲らしめ、反省させるしかないが・・・

お蔵入り  
胸に秘めたる  
芸だけど  
今再び  
見せてほしいな

通信公

いったんお蔵入りした落語の断を、時期を置いて再びやってみると、意外に・・・一度寝かせてみると、熟成される

みな腹  
食べ過ぎて  
欲の皮  
もう食べまいぞ  
苦しがるらん

中納言兼輔

バイクンクなど食べ放題だからといって、欲張って、鱧腹食べるのは・・・欲張ると、腹が張る

山里は  
冬は寂しさ  
勝りけり  
やはり都会は  
にぎやかでよい

源宗于朝臣

雪に閉ざされた山里は寂しい。やはり都会の喧騒が寂しさを紛らわせてくれる。でも都会は大雪に弱い・・・？

029 凡河内躬恒 心あてに  
折らばや折らむ 初霜のおき  
まどはせる 白菊の花



世の平和のために、戦わざるを得ない矛盾・・・戦わずして勝つ方法はないものか？

033 紀友則 ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ



日本の国土面積は世界 60 位であるが、領海面積は世界第 6 位。ここに埋蔵されている海底資源に期待できる。

037 文屋朝康 白露に 風の吹きしく 秋の野は たらぬきとめぬ 玉ぞ散りける



賭け事、勝負事にあまりのめり込まなかった。勝つことに執着しなかった分、勝利の味も味わえず人生終わるのか

030 壬生忠岑 ありあけの つれなく見えし 別れより 暁ばかり 憂きものはなし



酒を飲み過ぎて二日酔い。もう絶対飲まないと、酒のない国にいてみても、また三日目に戻る・・・

034 藤原興風 誰をかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに



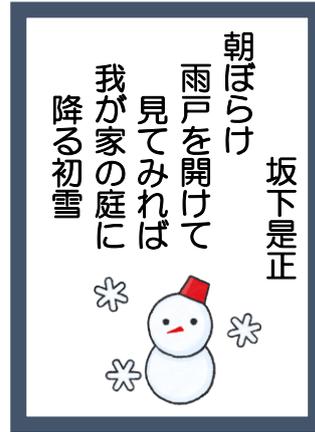
何もかも知らぬところへ一人旅に出て、不安もあるが、新しい出会いや発見が期待される・・・

038 右近 忘らるる 身をば 思はず 誓ひてし 人のいのちの 惜しくもあるかな



昔から怖いものに地震雷火事親父というのが、親父は怖くない。本当は親父ではなく、大山風（おおよじ=台風）とか

031 坂上是則朝ぼらけ ありあけの月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪



今年も雪が降った。初雪や狭き庭にも風情あり。白い雪が枯れ木に花を咲かせてくれて、景色が一変する・・・

035 紀貫之 人はいさ 心も 知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香に匂ひける



故郷を出て、永い歳月を経過し、年老いた。でも華やいていた昔の彼や彼女と会いたい同級会・同窓会・・・

039 参議等 浅茅生の 小野の 篠原 しのぶれど あまりで などか 人の恋しき



初恋はいつ頃、だれと？秘密です。初恋の味「カルピス」を薄めず飲んで、生涯原液です・・・

032 春道列樹 山川に 風のかけたる しがらみは 流れも あへぬ 紅葉なりけり



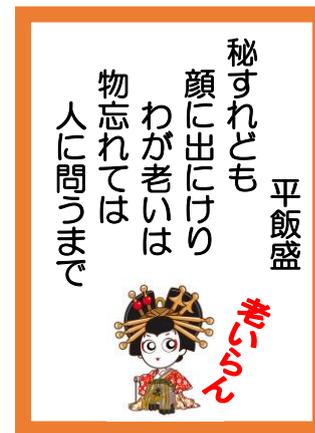
赤穂浪士の合言葉「山と川」で単純だったが、最近の暗証番号やマイナンバーは複雑で覚えられない・・・

036 清原深養父 夏の夜は まだ酔いさめぬ 明けぬるを 体のいすこに 深酒宿る 清原深養母



夏の暑い夜、ビールを飲み過ぎた。許容範囲を超えて、ビール腹に・・・

040 平兼盛 しのぶれど 色に出でにけり わが恋は 物や 思ふと 人の問ふまで



老いは隠せない。顔に出て、体力が衰え、物忘れが多くなり、脳力まで衰えた・・・

